

Title	計画7-2 白神山地山麓に生息するニホンザルの遊動：個体レベルの遊動パターンの解明(VI 共同利用研究 2.研究成果)
Author(s)	揚妻, 直樹
Citation	霊長類研究所年報 (2001), 31: 137-138
Issue Date	2001-10-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/165645
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

乳頭は外形が円柱状であるが、その固有層乳頭は、外側に 10 個前後の板状のヒダが突出しサボテン状を呈していた。ワオキツネザル糸状乳頭の固有層乳頭は 13~18 個の円錐形乳頭が環状配列し、舌根に近いほど小型化していた。茸状乳頭は外形が半球状であるが、その固有層乳頭は、外側に 12~14 個の板状のヒダが突出しサボテン状を呈していた。

今回観察した 3 種霊長類の糸状乳頭の固有層乳頭は、個数は異なるがいずれも環状配列を示したことから、環状配列は霊長類共通の形態と考える。茸状乳頭の固有層乳頭は、新世界ザルのコモニスザルと原猿のワオキツネザルがサボテン状を示し、この様相が一部の食虫目やウサギ目のものと極めて類似していることから、旧世界ザルのニホンザルと比べ、原始形態を留めていると考える。

計画 7-1

ニホンザルにおける採食行動の発達

上野有理 (京都大・霊長研)

ニホンザルはどのように食物レパトリを身につけていくのだろうか。ニホンザルのように季節・生息地にわたり幅広い食性をもつ種においては、その過程に社会的学習が関与すると有利だと考えられている。そこで、本研究ではとくに社会的影響に着目し、ニホンザルが食物レパトリを身につけていく過程について検討することを目的とする。今年度は、乳幼児における採食行動とそのさいみられる他個体との関わりについて明らかにするため、縦断的調査をおこなった。

調査地は京都嵐山岩田山自然遊園とし、昨年度から観察をおこなっている嵐山 E 群出自の乳幼児 4 個体 (1998 年生まれ雌 2 個体、1999 年生まれ雌 2 個体)、およびそれぞれの母親個体を観察対象とした。

結果、乳幼児個体において「採食個体をじっと見る」、「採食個体の鼻面をかく」などの行動が頻繁に観察された。これらの行動はオトナ (母親) 個体ではほとんどみられず、乳幼児に固有の行動と考えられた。観察期間中、対象の乳幼児個体はまだ試行錯誤の時期にあったと考えられることから、これらは食物レパトリを身につけていくのにかかわる行動の 1 つと考えられた。

計画 7-2

白神山地山麓に生息するニホンザルの遊動：個体レベルの遊動パターンの解明

揚妻直樹 (北海道大・北方生物圏フィールド科学センター・苫小牧研究林)

白神山地山麓の秋田県八森町において、6 頭のサルの遊動様式をラジオテレメトリー法により調査した。調査は 2000 年 2 月、3 月、6 月、10-12 月、2001 年 3 月に各月 3-7 日ずつ行った。

①群れサイズが 2-30 頭の TK 群にはメス 2 頭とオス 1 頭に発信機がついており、この 3 頭は多くの場合お互いに近い場所に滞在し、同方向に移動していた。ただし、6 月に遊動域を大きく移動させた時期には、メス 1 頭が他個体と別に遊動したと思われる日があった。調査期間を通じて特定された TK 群の遊動域面積は約 12km²であった。

②群れサイズが数頭の IC 群 (メス単独でも観察されている) にはメス 1 頭に発信機がつけられていた。このメスの電波は 6 月までしか取れなかったが、2 月・3 月・6 月の遊動域は約

1.5km²と非常に狭かった。このメスの遊動域はTK群の遊動域内に含まれていた。6月までのTK群とIC群の遊動域を比べると、同時期ではお互いに避けあっていた。

③1999年の調査時にはTK群の遊動域内で遊動していた単独オスHM2はTK群の遊動域を離れ始め、2000年11月以降は以前の遊動域から5kmほど離れた地域を遊動していた。

④一方、TK群に隣接した遊動域を持つ単独オスHM4は1999年の交尾期に一時、TK群の遊動域内に滞在していたことが解かっているが、2000年の10-12月にはそのような遊動域の一時的なシフトは見られなかった。

計画 8-1

中国地方東部におけるニホンザル地域個体群の分布調査

渡邊義雄（美作女子大）・林 勝治（広島県立大）

昨年に引き続き、中国地方東部において、ニホンザルの分布調査を行った。岡山県では、未調査であった9町村で聞き取り調査を行った。いずれの町村でも、群れの生息は確認できなかった。しかし、県東北部では、兵庫県からのハナレザルの侵入が推測された。まだ、未調査の町村があるが、昨年まで確認された以外には群れは存在しないと思われる。また、本年度は、1998年に行った質問紙調査のうち、被害状況の推移について分析した。群れの生息地を中心に20年前から被害の地域が周囲に広がっていることが分かった。被害が出始めた時期別に、その植生を分析した結果、自然林及び2次植生の割合は6割前後で比較的安定している。しかし、ここ数年前から被害の出始めた地域には、二次林の構成ではコナラ群落が少なく、一方で、農地が多く含まれていた。このように、近年になって、サルによる農地への被害が広がっている様子が分かった。

鳥取県では、日野町と八東町周辺の地域を中心に聞き取り調査を行った。この2町以外では西部の江府町にニホンザルの群れが生息しているとの報告があった。また、鳥取県公文書館において、各地の町誌を閲覧したところ、1970年くらいまでは、大山町・若桜町・国府町・河原町に群れが生息していたようである。

計画 8-2

丹沢東北山塊におけるニホンザルの生息と人間活動の影響

福田史夫（共立薬科大）

聞き込みと踏査に基づいて3群の生息が明らかになり、さらに複数群のフィールドサインによる情報を得ることができた。調査地域内ではM群のみが野荒らしをしており、隣接するU群を含めて他の群れによる野荒らしは生じていない。

1) 道志川側の集落でM群による猿害が生じていないのは、道志川側はスギの植林が山麓まで被っており、しかも、北に面した山麓のため冬季は寒く、サルにとって利用する自然の食物がないためであると考えられる。東部の鳥屋地区は道志川側と同じように麓まで植林に被われているが、冬には日溜まりとなる南山や仙洞寺山があり、しかもその間に集落があるため、M群のサルたちにとって移動の際に農耕地に侵入できる地形となっている。2) 野荒らしをしないU群とM群の、行動域内の人間活動の違いは、行動域内の集落農耕地と猟区の有無である。U群の行動域内の80%以上が猟区になっており、集落農耕地は皆無である。が、M群の行動域の10%弱が猟区に組み込まれているだけである。猟期の週末はシカ、イノシシや鳥獣が行われる。そのため、